右隻

左隻

口絵１　波嶋筆「アイヌ人物六曲一双屏風（アイヌ人物屏風）」東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵

口絵２　平沢屏山筆「種痘施行図」東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵

「アイヌ人物屏風」と「種痘施行図」
－2つのアイヌ絵の教材化をめぐって－

下山　忍

“Ainu Jinbutsu Byobu,” Ainu People Drawn on folding partition screens, and “Shuto Segyozu,” Enforced Smallpox Vaccination of the Ainu People
—utilization of the two Ainu-paintings for teaching material —

SHIMOYAMA Shinobu

キーワード：アイヌ人物屏風　種痘施行図　夷酋列像　国民国家　近代化への問い

要旨

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館は183点のアイヌ関係資料、そのうち絵画を17点所蔵している。本稿ではその中の「アイヌ人物屏風」と「種痘施行図」の教材化に向けての情報の整理と活用の提案を行った。すなわち、「アイヌ人物屏風」は、歴史教材としてよく知られている「夷酋列像」との関連性が高く、その虚構性に気付かせ考察させる上で有効な教材である。一方、「種痘施行図」は、18世紀後半のロシアの南下に対応する「蝦夷地幕領化」の時期における「撫育政策」の好適な資料であり、例えば新科目「歴史総合」において、国民国家の形成を考察させる上で「問いを表現する」学習活動などにも活用できる教材である。いずれも学習指導要領等が求めるアイヌの教材化の視点にも合致している資料となりうることを確認できる。

Abstract

Tohoku Fukushi University Serizawa Keisuke Art and Craft Museum has 183 Ainu-related materials, 17 of which are paintings. In this paper, we have proposed the organization and the utilization of information for “Ainu Jinbutsu Byobu,” the Ainu People Drawn on folding partition screens and “Shuto Segyozu,” Enforced Smallpox Vaccination of the Ainu People as teaching materials. “Ainu Jinbutsu Byobu” is highly related to the well-known “Ishu Retsuzo”, a historical teaching material, and is an effective way for making people aware that it is fiction. On the other hand, “Shuto Segyozu” work is appropriate for explaining “Buiku Seisaku,” the Nurturing Policy. This took place during the period of "Ezochi Bakuryoka,” the Ezo-land Being Ruled by the Shogunate, which coincided with the southward movement of Russia in the latter half of the 18th century. For example, in the new subject called “Modern and Contemporary History”, this teaching material can be used for learning activities which “express questions” in order to make students consider the formation of a nation. It is confirmed that both of them would be good materials, meeting the viewpoints of the utilization of the Ainu teaching materials, required by the Course of Study.

1　はじめに

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館は、型絵染の人間国宝芹沢銈介の作品約3000点や型紙約10000点を所蔵しているが、そのほかに銈介が自らの創作活動の参考とするために収集した多くの工芸品等も所蔵している。アフリカのマスク・染織品・木工品・土偶・土器等約180点、中南米の染織品等約150点、インド・東南アジアの染織品・装飾品約380点、そのほか中国･台湾･朝鮮の染織品、日本の染織品･絵馬･箪笥・漆器等、柳宗悦の民芸運動にも関わっていた芹沢銈介の審美眼により収集された所蔵品には、見事なものが多く、本学の初年次教育であるリエゾンゼミⅠにおいても学生の鑑賞に供するなど活用されているところである。

さて、同館にはアイヌ関係資料も183点あり、その内訳は絵

画17点、皮革資料2点、金工・武具類14点、染色資料42点、装身具類10点、木漆工89点、編組品9点と多彩である（註1）。同館はこれらの資料を活用した展示を何度か開催しているが、直近では2016（平成28）年9月から2017（平成29）年2月にかけて「アイヌの工芸展」を開催した。筆者もこの時に初めて「アイヌ人物屏風」と「種痘施行図」という2つのアイヌ絵を鑑賞する機会を得たが、その印象がとても鮮明だったこともあって、筆者の専門分野である社会科（地理歴史科）教育における教材化について考え始めたという経緯がある。

このうち「アイヌ人物屏風」については、後述するように、芹沢長介「アイヌ文化展出品資料について」（註2）、濱田淑子「波嶋筆 アイヌ人物屏風」（註3）、佐藤花菜・濱田淑子「『アイヌ人物六曲一双屏風』（東北福祉大学コレクション）と関連するアイヌ風俗画」（註4）によって紹介されており、社会科（地理歴史科）教育の観点からは、筆者による「『アイヌ人物屏風』との比較を通した『夷酋列像』の教材化について－「地理歴史科指導法」の実践から－」という実践報告がある（註5）。

一方「種痘施行図」については、濱田淑子「平沢屏山筆『種痘施行図』」によって紹介されている（註6）ほか、松木明知「新出の平沢屏山のアイヌ種痘図に関する一考察－オムスク造形美術館所蔵の『種痘図』を巡って－」にも若干触れられている（註7）。作者の平沢屏山については、佐々木利和・五十嵐聡美・新明英仁らによる研究の蓄積もある（註8）。また、筆者のゼミに所属していた北海道出身の学生がオムスク造形美術館所蔵「種痘図」との比較という観点からゼミ論で扱うこともあった（註9）。

本稿では、こうした成果を踏まえながら、本学芹沢銈介美術工芸館が所蔵する「アイヌ人物屏風」と「種痘施行図」という2つの貴重なアイヌ絵に関する情報を整理し、教材化について考えてみたい。

2　波嶋筆「アイヌ人物屏風」の教材化について

(1)「アイヌ人物屏風」の基本情報

本学の所蔵する「アイヌ人物屏風」は、正式には「アイヌ人物六曲一双屏風」といい、172.5cm×352.0cmの屏風に12人のアイヌ人物が描かれている（以下、本稿では「アイヌ人物屏風」とする）。東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館長を務めた芹沢長介が1989（平成元）年に首都圏の古美術店で見つけて購入したもので、伝来の詳細は不明であるが九十九里浜の網元が秘蔵していたとの話もあったという。

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館では1990（平成2）年から1991（平成3）年にかけて「アイヌ文化展」を開催して「アイヌ人物屏風」を公開した（註10）。この時、「アイヌ人物屏風」に描かれた人物のうち6人が「夷酋列像」と同じ構図であることなどから大きな反響を呼んだ。ちなみに「アイヌ人物屏風」と「夷酋列像」で構図の一致する6人の人物の対応関係は以下のようになっている。

アイヌ人物屏風	夷酋列像
守り刀を持つ男	ツキノエ
槍を持つ男	イコトイ
犬を連れた男	ポロヤ
白熊を曳く男	イニンカリ
敷物に座る男	マウタラケ
和人と挨拶する男	ションコ

なお、「アイヌ人物屏風」の12枚全てに「波嶋」という落款があって、この波嶋が作者と考えられる。波嶋の「波」が「夷酋列像」の作者である蠣崎波響の「波」と一致することも大きな反響を呼んだ一因であった。蠣崎波響には「波」の文字を号に持つ弟子が多く、その関連性が想起されたのである。実際に佐野（櫻庭）波島という弟子もいるが、その作風や力量から別人と考えられている（註11）。

「アイヌ人物屏風」の穏やかで落ち着いた画面構成と写実的な作風などに円山派の影響や、人物の柔和な表情、軽妙な衣褶線、余白を生かす描法などに四条派の影響も見られ、かなりのデッサン力をもった絵師の制作であることが分かるという。後述するように、蠣崎波響自身が円山応挙に師事していることもあり、波響との関連性は大いに推定されるところであるが、現在のところ作者「波嶋」に関しては未詳である。

さて、前述の「アイヌ文化展」開催以降、「アイヌ人物屏風」と類似した構図をもつアイヌ絵が多く発見・報告された。これらの類図は相互の模写によって結びついているとされるが、「アイヌ人物図屏風」はその原図（共通する原本）かそれに近いところに位置する作例と考えられ、また、その制作時期は「夷酋列像」の制作と近い時期であろうと推定されている（註12）。

以上のように、「アイヌ人物屏風」の基本情報を踏まえると、教材化を考えていく上でも「夷酋列像」との比較は重要な視点であると思われる。なぜならば、後述するように「夷酋列像」は、社会科（地理歴史科）の教材としてよく知られている資料であり、「アイヌ人物屏風」との比較検討を通して、さらに深い読み取りが可能になると考えるからである。美術史的には「夷酋列像」と「アイヌ人物屏風」の直接的な関係は今後の研究を待たねばならない面もあるが、

本稿では社会科（地理歴史科）教育の観点から考えてみたいと思う。

(2)「夷酋列像」について

①「夷酋列像」の基本情報と背景

先に「アイヌ人物屏風」に描かれた人物のうち6人が「夷酋列像」と同じ構図であること、そのために大いに反響があったことなどを述べたが、先ず「夷酋列像」について簡単に触れておきたい。

「夷酋列像」とは、松前藩家老で画家でもあった蠣崎波響によって1790（寛政2）年に描かれた12面の絵画で、それぞれには1789（寛政元）年に起きたクナシリ・メナシの戦いで松前藩に協力したアイヌの首長12人が描かれている。現在、函館市中央図書館に2面（イコトイ・ションコ）とフランスのブザンゾン美術考古博物館に11面（イコリカヤニを除く）が伝えられている。これらは、いずれも別系統の真筆と考えられており、1面はそれぞれ40.0×30.0cmである。2015（平成27）年には、これらを一同に集めた「夷酋列像－蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界－」展が北海道博物館・国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館で開催されて大きな反響があった（註13）。

「夷酋列像」の制作に関連するクナシリ・メナシの戦いとは、場所請負人であった飛騨屋の酷使に耐えかねたアイヌが蜂起し、国後島と対岸の目梨地方の各漁場を襲撃し、和人71人を殺害した事件を発端とする。この報を受けた松前藩は鎮圧部隊を派遣するが、実際に戦闘には至らず、国後の首長ツキノエや厚岸の首長イコトイらの協力を得て蜂起したアイヌを懐柔し、その後、捕らえた首謀者37人を処刑した。アイヌの和人に対する武力蜂起はこれ以降なく「アイヌ最後の戦い」とも言われている。その首級は塩漬けにされて松前に運ばれて梟首され、逆に松前藩に協力したアイヌ43人は鎮圧部隊とともに松前城下に凱旋した。この時に松前藩は藩の所有する蝦夷錦などの豪華な衣装をアイヌに貸与して着用させたという（註14）。

「夷酋列像」には松前広長による「序」が添付されており、ここには1789（寛政元）年に起きたクナシリ・メナシの戦いの顛末とこの絵画の制作意図が記されている（註15）。著者の松前広長は、作者である蠣崎波響の叔父にあたるが、『福山秘府』や『松前志』の編纂や執筆に関わった当時の松前藩を代表する文人である。さらに広長自身も第6代藩主松前邦広の五男という一門であり、この時は家老を務めていた。

こうしたことから、「序」は、いわば「夷酋列像」に関する松前藩としての公式見解と言っても良いが、これによれば、松前藩に貢献した「有功」の12人を賞賛し、かつ「夷人」を「勧懲」するために藩主松前道広が命じたとある。「夷人」とはアイヌのことであり、「勧懲」とは「勧善懲悪」、すなわち善行を勧め悪行を懲らすことである。クナシリ・メナシの戦いの首謀者たちはすでに梟首されていたが、その鎮定に協力したアイヌたちには松前城下に凱旋させた上、その首長たちの肖像画を描いて賞賛したということである。

②　作者・蠣崎波響

「夷酋列像」を描いた蠣崎波響は、本名は広年といい、1764（明和元）年に松前藩第12代藩主資広の第五子として生まれた。しかし、生まれた翌年に父が亡くなって兄道広が藩主の跡を継いだため、家禄500石の家老蠣崎家の養子となった。幼い頃から画を好み、8歳の時に疾走する馬を描いてその見事さに人々を驚かせたという逸話が残る。その才能を見出した前述の叔父松前広長の尽力によって9歳の時に江戸に上り、南蘋派の宋紫石らに画を学んだ。

その後、1783（天明20）年、20歳の時に松前に戻り、松前に滞在していた大原呑響にも画を学び、その一字を得て「波響」と号したという。1789（寛政元）年のクナシリ・メナシの戦いに際して、藩主の命により「夷酋列像」を描いた。そして、完成後の1790（寛政2）年11月から翌年秋にかけて「夷酋列像」を携えて上洛するのである。その政治的意図については後述するが、この時に京都で円山応挙に師事し、その影響を受けたとされる。

1807（文化4）年、幕府が全蝦夷地を直轄地にしたため、松前藩は梁川（福島県伊達市）に転封されたが、この時に波響も梁川に移り、家老として松前復領に尽力した。1821（文政4）年、松前藩が復領すると松前に戻り、1826（文政9）年、63歳で没した（註16）。

すなわち、蠣崎波響は、藩主一族を出自とする松前藩の重役であり、その生涯は松前藩の去就とともにあったが、多くの先学が指摘するように、この事実は「夷酋列像」の背景を考える上で避けては通れないことであると思われる。さらに、長期にわたる江戸在住やその画人としての活動から独自のネットワークを有していたことも当然ながら推定されるのである。

③「夷酋列像」の虚構性

「夷酋列像」については、精緻な表現や鮮やかな色彩が評価される一方、その虚構性を指摘する研究もある。菊池勇夫によれば、描かれたアイヌの首長12人のうち実際に松前

城下に来たことが確認できるのはシモチ・イニンカリ・ニシコマツケ・イコリカニヤ・ヲツケニ（チキリアシカイ）の5人のみであり、それ以外の人物を蠣崎波響は見ていないことになる（註17）。こうしたことを踏まえ、白石恵理や五十嵐聡美は、現実とはかけ離れた華美な衣装、類型化された容貌や誇張されたポーズから、実写とは考えられないとしている（註18）。この類型化された容貌や誇張されたポーズということについて言えば、春木晶子は2枚の「関羽図」との類似を指摘している。すなわち、蠣崎波響が中国三国志の豪傑「関羽」を描いた図の構図が「夷酋列像」のイコトイに類似しており、また波響の師である宋紫石の描いた「関羽」の図の構図もツキノエに類似しているというのである（註19）。

このように「夷酋列像」には先行作例があるという点については、「夷酋列像」のマウタラケと月僊玄瑞「列僊図賛」の「廣成子」との類似性を指摘した井上研一郎の研究に始まるが（註20）、春木晶子もツキノエの容貌について、先の「関羽図」のほかに佐竹曙山「蝦蟇仙人図」や波響自身の「南蛮騎士の図」との類似性を指摘している。そのほか、佐々木利和・谷本晃久は、足を揃えたまま振り向きざまに矢を射る「夷酋列像」のシモチのポーズが実際のアイヌの射法とは異なっており、「訓蒙図彙」や「和漢三才図会」という近世の百科事典類に見えることを指摘するとともに、「夷酋列像」12人の全てが一文字眉に三白眼であることをシャモ（和人）から見た「夷」の強調であるとしている（註21）。また、井上瑠菜は、「夷酋列像」が清代人物版画の体裁との類似が認められることから、その先行作例は中国画譜にあるとしている（註22）。

以上のように、「夷酋列像」の先行作例を特定していくことは、「夷酋列像」がアイヌの実写でないとする虚構性を証明することになるが、この点については、同時代の人々の疑念があったことにも触れておきたい。蠣崎波響は「夷酋列像」を携えて上洛し、京都で多くの公家や文人墨客に披露するのだが、それを閲覧した一人に、当時「和歌四天王」の一人とされていた天台僧の慈延がいた。春木晶子は、慈延による「夷酋列像賛辞文」に見える「げにいとめつらに気うときかたちしたり」（噂通りとても普通とは違って妙である）という言葉に注目し、当時そうした風聞があったことを前提として「夷酋列像」とアイヌの実像との乖離という認識を示す表現と捉えている（註23）。

また、平戸藩主松浦静山は、1799（寛政11）年に「夷酋列像」を借用して画工に模写させていた。その後、知人の幕府役人・松平忠明が蝦夷地に出かけ、絵師にアイヌを描かせて持ち帰った画を見ると「夷酋列像」とは全く異なっていた。不思議に思った静山が尋ねると、忠明は「夷酋列像」はことさらに粉飾を加え、真実の姿を失ってしまっている。実際のアイヌの姿は描くことができないほどの野卑な身なりであったと答えたという（註24）。これら2つの事例は、同時代における「夷酋列像」の閲覧者による虚構性の指摘である。

（3）「夷酋列像」と「アイヌ人物屏風」との比較

前節では「夷酋列像」の虚構性について述べたが、「夷酋列像」と「アイヌ人物屏風」の描き方に違いはあるのだろうか。この点について、筆者の方で同じ構図をもつ6人の人物について比較し、その要点を下記の表にまとめた。

「夷酋列像」	「アイヌ人物屏風」
【ツキノエ】 三白眼、耳に山丹玉 左向きに椅子に着座、熊の毛皮 赤の蝦夷錦の上に黒のコート、左衽 腕貫（腕袋）、ブーツ	《守り刀を持つ男》 くぼんだ眼、耳にニンカリ 右向きに椅子に着座、熊の毛皮 アットゥシの上に蝦夷錦、左衽 ユクケリ（鹿皮靴）
【イコトイ】 三白眼、耳に山丹玉 黒の蝦夷錦の上に赤のコート、左衽 腕貫（腕袋）、裸足	《槍を持つ男》 くぼんだ眼、耳にニンカリ アットゥシ、左衽 ユクケリ（鹿皮靴）
【ションコ】 三白眼、耳に山丹玉 赤い衣服の上に緑の蝦夷錦 腕貫（腕袋）、刀、ブーツ	《和人と挨拶する男》 （和人とともに描かれている） くぼんだ眼、アットゥシ、 （籠手・刀なし）、裸足
【ポロヤ】 三白眼、耳にニンカリ 赤の蝦夷錦の上にアットゥシ タシロ（山刀）、煙草入れ、裸足	《犬を連れた男》 くぼんだ眼、耳にニンカリ アットゥシ、左衽 タシロ（山刀）、裸足
【イニンカリ】 三白眼 蝦夷錦、マキリ（小刀）、煙草入れ 槍、裸足、白熊・黒熊の２頭	《白熊をひく男》 くぼんだ眼 アットゥシ、左衽 槍、裸足、白熊１頭
【マウタラケ】 三白眼、蝦夷錦、左衽 手に玉飾り 敷物の上に熊の毛皮、裸足	《敷物に座る男》 くぼんだ眼、蝦夷錦、左衽 手に玉飾り 敷物、裸足

上記の表によって「アイヌ人物屏風」と比較すると「夷酋列像」の特徴が浮かび上がってくるが、それらを項目別にまとめると以下のようになる。

①　左衽

異なる描き方を見せる両者であるが、「左衽」については共通している。左衽とは、右の衽を左の衽の上に重ねて着ることで、いわゆる「ひだりまえ」のことであるが、この時期のアイヌには奈良時代以前の左衽の風習が残っており、

木の繊維を織って仕立てたアイヌの衣服であるアットゥシも左衽に着るのが一般的であったという（註25）。

しかし、本来右衽に仕立てられている清朝の官服などの蝦夷錦やロシアのコートなども左衽に描いているのは、アイヌは左衽であるという当時の和人画家（アイヌ絵師）の観念によるものであろう。「アイヌ人物屏風」の《和人と挨拶する男》には、アイヌと和人が描かれているが、和人の方は右衽であり、アイヌと描き分けられている。そうした背景には「被髪左衽」という言葉があるように、衣服を左衽に着るのはアイヌの風俗という和人（絵師）たちの認識があったと思われる。

②　三白眼

「左衽」と異なり、両者が異なるのが「眼の描き方」である。「夷酋列像」では全員が三白眼で描かれている。三白眼とは、黒目が上方にかたよって、左右と下部の三方に白目のある眼のことで、凶相とされており、恐ろしい表情となる。なお、同じ蠣崎波響が「夷酋列像」の【イコトイ】と同様の構図で描いた「関羽図」（註26）は三白眼で描かれていないことから、三白眼はアイヌの特徴として描いたということが分かる。

これに対して「アイヌ人物屏風」では、全員がくぼんだ眼に描かれており、その違いは明らかである。この「くぼんだ眼」というのは筆者の表現であるが、アイヌは眼窩の内側壁が和人のように隆起せずに眼球は沈んで見えるという人類学・解剖学からの知見もある（註27）。前述のように、三白眼を和人による「夷」の強調であるという指摘もあるが（註28）、「アイヌ人物屏風」を見る限り、それはアイヌの特徴を捉える際の和人（絵師）たちの共通認識ではなかったことが窺える。

③　蝦夷錦

次に服装について見ていくと、教材で最もよく扱われる「蝦夷錦」は両者に共通しているが、比較すると「夷酋列像」では6人全員が着用しているのに対し、「アイヌ人物屏風」では2人にすぎない。「アイヌ人物屏風」では、蝦夷錦よりも、木の繊維を織って仕立てたアイヌの民族衣裳であるアットゥシを着用している人物の方が５人と多い。アイヌ伝来のアットゥシを中心に描く「アイヌ人物屏風」に対し、「夷酋列像」は中国から渡来し異国的な雰囲気をもつ蝦夷錦を中心に描いていることは対称的であると言える。

④　コート

異国的な雰囲気と言えば、教科書等でも強調されているロシア風のコートであるが、これは「夷酋列像」のみに見られ、「アイヌ人物屏風」には見られない。「夷酋列像」でコートを着用しているのは【ツキノエ】と【イコトイ】である。【ツキノエ】は赤い蝦夷錦の上に黒いコートを羽織っているのに対し、「アイヌ人物屏風」の《守り刀を持つ男》はアットゥシの上に蝦夷錦を羽織っている。また、【イコトイ】も黒い蝦夷錦の上に赤いコートを羽織っているが、《槍を持つ男》はアットゥシのみを着用というように描き方の違いを見せている。

⑤　ブーツ

ブーツも「夷酋列像」のみに見られ、「アイヌ人物屏風」には見られない。「夷酋列像」では【イコトイ】も【ションコ】もロシア風のブーツを履いているが、「アイヌ人物屏風」ではロシア風のブーツを履いた人物はおらず、《守り刀を持つ男》と《槍を持つ男》はアイヌの伝統的なユクケリ（鹿皮靴）を履いている。

⑥　革製の腕貫

また、「夷酋列像」では【ツキノエ】・【イコトイ】・【ションコ】の３人が革製の腕貫（腕袋）を着用しているが、「アイヌ人物屏風」には描かれていない。断定はできないが、この腕貫（腕袋）はアイヌの伝統的な手甲（テクンペ）とは異なるように見える。

⑦　装身具

装身具についても、「夷酋列像」では【ツキノエ】、【イコトイ】、【ションコ】が山丹玉の耳飾り（イアリング）を付けている。山丹玉はアイヌ玉ともいうが、中央アジアから沿海州・樺太を経てもたらされたものである。これに対して「アイヌ人物屏風」には山丹玉は見られず《守り刀を持

左：守り刀を持つ男　　右：槍を持つ男
図1「アイヌ人物屏風」部分

つ男》、《槍を持つ男》、《犬を連れた男》は耳にニンカリを付けている。ニンカリとは、真鍮の輪に飾り玉を通した耳飾り（ピアス）で、アイヌでは5～6歳になると耳たぶに穴を開けて身に付けたという。こうした針金状の装身具は、15世紀以前のアイヌ遺跡にも見られるとのことであり（註29）、山丹玉よりも早い時期からアイヌが身に付けていたものと考えられる。

以上、同じ構図をもつ「アイヌ人物屏風」との比較を通して見ると、「夷酋列像」の描くアイヌは、恐ろしく猛々しいばかりでなく、異国風を強調しており、特にロシアを意識させる描き方となっていると言える。

（4）教材としての「夷酋列像」と「アイヌ人物屏風」からの視座

①　「四つの口」における国際交流

「夷酋列像」が社会科・地理歴史科の教材としてどのように扱われているかについては前稿で述べたが（註30）、その1つは蝦夷錦から近世の「四つの口」における国際交流を考えさせるための教材であり、楳澤和夫による実践が知られている（註31）。

「蝦夷錦」とは、清朝官服など雲竜文を特徴とした中国産の錦のことであり、歌舞伎役者が身にまとうなどして多くの人に知られた。山丹交易によって樺太から蝦夷地を経由して伝来したもので、江戸や大坂の人には松前＝蝦夷地からもたらされた錦という意味でこう呼ばれた。つまり、中国産の物品が蝦夷地の松前から入って来たことを象徴的に示す物品であり、近世日本は「鎖国」で国を閉ざしていたのではなく、長崎でオランダ・中国、対馬で朝鮮、薩摩で琉球（さらに中国）、そして松前で蝦夷地（さらに中国）という「四つの口」で通交・貿易を行っていたという見方を説明するための教材として用いられているのである。

こうした面からの教材化は教科書等にも反映しており、例えば、中学校教科書『新編　新しい社会 歴史』（東京書籍）は、イコトイの画像に「蝦夷錦を着たアイヌの首長」というタイトルを付し、「蝦夷錦はアイヌの人々のどのような交易の跡が読み取れるか、考えましょう」という発問を載せている。また、同じく学び舎の中学校教科書『ともに学ぶ人間の歴史』は、ツキノエの画像に「蝦夷錦を着てロシアのブーツをはいている」という解説を加えている。高等学校では教科書には見られないものの、多くの図録（補助教材）がイコトイの画像を載せて蝦夷錦とロシア風のコートに着目させており、山丹交易について詳述しているものもある。

近世の「四つの口」での国際交流のあり方の教材として蝦夷錦を扱うことに異論があるわけではないが、「アイヌ人物屏風」に見られるように、アイヌの衣裳としてはアットゥシが一般的であったことは指摘しておきたい。五十嵐聡子は、蝦夷錦が和人社会に流出しアイヌの手元には残らなかった可能性について言及している（註32）。

さらに慎重な取扱いが求められるのはロシア風のコートやブーツであろう。これらもアイヌがロシア人との交易によってそれを入手したことを示す教材として扱われているが、アイヌの着用は「夷酋列像」の虚構である可能性が高く、実際のアイヌの服飾として示すことには検討の余地がある。

②　国際環境の変化と松前藩の政治的意図

もう1つは「夷酋列像」の虚構性から松前藩の政治的意図に気付かせ、近世後期の国内情勢・国際環境を考察させるための教材である。こちらについては、加藤公明による実践が知られている（註33）。

前述のように、蠣崎波響は完成したばかりの「夷酋列像」を携えて1790（寛政2）年に上洛し、11月頃まで京都に滞在した。「夷酋列像」は多くの公家や文人墨客に披露されて大きな話題となり、光格天皇の天覧にも供された。閲覧に供した人は40人にのぼり、その間に「夷酋列像」を借用して模写した模本も松平定信をはじめ8家に及んでおり、幕府に献上した可能性も高いという（註34）。

クナシリ・メナシの戦いに際してのアイヌへの「勧懲」という「序」に記されただけの理由ならば、蠣崎波響が「夷酋列像」を携えて上洛する必要はなかった。松前藩が所蔵して、それを時折ウイマム（御目見え）などで松前に来るアイヌに閲覧させれば良かったのである。波響がわざわざ上洛する背景には、松前藩関係者とアイヌ以外の人々に「夷酋列像」を閲覧させるという意図があったと考えるべきで、実際に天皇・公家、諸大名に閲覧させているのである。その目的は、クナシリ・メナシの戦いを迅速に鎮定するとともに、その協力者であるアイヌ（＝「夷酋列像」に描かれた屈強な者たち）を従えている松前藩の勢威を視覚的にアピールすることにあり、いわば松前藩としてのメディア戦略であった。18世紀半ば以降のロシアの接近、それに対応する幕府による蝦夷地調査などから幕領化への危機を感じた松前藩による対応策であったということができる。

加藤公明の実践は、生徒同士の討論を通して気付きや考えを深めさせていくところに特徴があるが、「夷酋列像」はクナシリ・メナシの戦いというアイヌの蜂起が幕府に蝦夷地幕領化の口実を与えることを恐れた松前藩が、ある政治的な意図のもとに家老である蠣崎波響に描かせた絵画であ

るという読み取りのもとに、その仮説を提案させるというものである。こうした実践の方向性は、まだ教科書や図録（補助教材）には反映していないが、「夷酋列像」の研究成果を踏まえたものと言える。

この実践では、生徒たちに「三白眼」・「蝦夷錦の着用」・「左前の着付け」などの異様性に気付かせ、教師の提示した明治10年代のアイヌの写真（註35）との比較を通して、その虚構性・作為性を確信させるのだが、ここで明治時代の写真に代えて同時代に描かれた「アイヌ人物屏風」を用いてこれと比較させる展開も考えられよう。

以上のように「アイヌ人物屏風」は、現在の歴史教育で広く活用されている「夷酋列像」との関連で用いれば、主にその虚構性に気付かせる上で有効な教材であると考えられる。さらに、こうしたいわば「夷酋列像」の補完的な扱いに加えて、2つの画像の構図の共通性に注目させる切り口もあろう。6人（あるいは12人でもよい）の守り刀や槍をもつ姿、犬や白熊を連れている姿、敷物に座る姿、和人と挨拶する姿などアイヌの姿態に注目させ、次期学習指導要領で想定されている学習活動である「生徒に問いを表現」させてもよい。例えば、「なぜ『夷酋列像』と『アイヌ人物屏風』に同一の構図が見られるのだろうか」や「なぜ、アイヌはこのような姿に描かれたのだろうか」という問いからは、アイヌ絵を描いた和人絵師、さらにそのアイヌ絵を求めた和人たちの認識を考えさせていく授業展開も考えられるのではないだろうか。

3　平沢屏山筆「種痘施行図」の教材化について

(1)「種痘施行図」の基本情報と類図

①　基本情報

次に「種痘施行図」の教材化について考えてみるが、先ず濱田淑子の研究に基づいて基本情報を確認しておきたい（註36）。「種痘施行図」は、紙本着色軸装で116.0cm×103.1cm（「讃」があるので本紙部分は70.4cm×92.2ｃm）である。1995（平成7）年の阪神淡路大震災直後に個人所有者から大阪市の書店が購入、さらに札幌市の書店を介して芹沢長介が購入し、その後東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館に寄贈したという経緯がある。同館では2005（平成17）年12月から翌年の3月にかけて特別展「アイヌ文化の新資料－150年前の集団種痘図・甲冑その他」を開催し、「種痘施行図」も展示した。

「種痘施行図」は1857（安政4）年に幕府が蝦夷地のアイヌに種痘を実施した様子を題材としており、箱館奉行所の一室を舞台としてアイヌの老若男女80数名・和人の医師や役人12名が描かれている。アイヌは裸足で縄状の帯を締め、海老のように腰をかがめて歩いている。男性は長い髭を蓄えて毛深く、女性は口の周りなどに入れ墨をするなどその特徴をしっかりと捉えている。

②　類図との関係

さて、越崎宗一のいう「蝦夷人種痘之図」（註37）・新明英仁のいう「桑田立齊アイヌ種痘接種図」（註38）など、この「種痘施行図」と同様の構図をもつ絵画がいくつか知られている。これらと「種痘施行図」の関係について、濱田淑子は原図と模写図の関係にあるという（註39）。

すなわち、後述するように、蝦夷地でのアイヌ種痘に際して箱館奉行としてこれを推進したのは村垣範正であったが、箱館の豪商・杉浦嘉七が平沢屏山に種痘の様子を描かせて村垣に献上した。この時の種痘医・桑田立斎も、その2年後の1859（安政6）年にこの村垣の持つ絵画（原図）から模写図を描かせて所有した。これは現在新潟県立美術館の所蔵になる。さらにその子孫が1940（昭和15）年、その桑田模写図をもとに日本画家・林司馬に依頼して2枚の模写図を作成し、現在1部を北海道大学附属図書館、1部を大阪大学医学部が所蔵する。すなわち3種類の模写図があるということになる。

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館が所蔵する「種痘施行図」には当初のものと考えられる軸題箋が残されているが、そこには「安政四年　蝦夷土人種痘施接之図　村垣蔵」とあり、箱館奉行であった村垣範正の家に所蔵されていたことを示している。そのような情報も踏まえ、「種痘施行図」が1857（安政4）年に杉浦嘉七が平沢屏山に描かせた原図と考えられている。

もう1点、ロシアのオムスク造形美術館所蔵の「種痘図」があり、2009（平成21）年から翌年にかけて日本でも公開された。西洋紙に描かれた20.4cm×32.7cmという法量であり、「種痘施行図」（本紙部分70.4cm×92.2ｃm）に比べて小さい。この「種痘図」はロシア科学アカデミー会員の植物地理学者エヴゲニイ・ミハイロヴィッチ・ラヴレンコから同館が1985年に寄贈されたもので、同氏が1949年にレニングラードの古書店で購入したという。日本からロシアへの伝来の経緯は分かっていないが、「辰冬初日」と記されていることから1868（明治元）年に平沢屏山自身が原図をもとに描いた絵画と考えられている（註40）。

なお、「公命蝦夷人種痘之図」を名付けられた錦絵も残されているが（註41）、これは桑田立斎が1859（安政６）に

描かせた模写図を二代歌川国貞に移させて木版刷物として知人に配布したものだという（註42）。

（2）作者・平沢屏山とアイヌ絵

「種痘施行図」の作者である平沢屏山は、1822（文政5）年、陸奥国稗貫郡大迫（現在の岩手県花巻市）に生まれた。家は比較的裕福だったというが、父の死後困窮し、あるいは義母と折り合いが悪かったという話もあって、弘化年間（1844～48）頃に弟と共に箱館に移住した。その地で絵馬を描いて生活し、酒好きだったことから「飲んだくれのえんまや（絵馬屋）」などと呼ばれていたという。その後、箱館の豪商杉浦嘉七の知遇を得て、その請負場所である十勝や幌泉（襟裳）などでアイヌとともに生活をしてその風俗を詳細に描いた。1876（明治9）に函館において54歳で死去した。「種痘施行図」のほかに、「アイヌ風俗十二ヶ月屏風」・「アイヌ熊送の図」・「オムシャ図」などの作品もよく知られている（註43）。

そもそもアイヌの伝統的な精神観では、人間や動物の姿を写すとそこに悪霊が取り憑いて災いをなすとされていたことから、アイヌ自身が絵画を描くことはなかった。だからアイヌ絵とは、和人によって描かれたアイヌの生活や風俗を主題にした絵画のことである。18世紀頃から和人によって描かれたアイヌ絵は、ロシアの南下に対応して蝦夷地に関心を持つ幕府や蝦夷地との交易に関わる商人たちにとって貴重な視覚的情報であった。また、エキゾティズムをかき立てるアイヌ絵は、博物学的関心を広げていた知識層や奇なるものを好んだ庶民の興味関心を反映して、盛んに模写され流布していった。19世紀になると、箱館開港によって来訪して来た外国人によっても収集された。アイヌ絵は需要も多く高額で売れたという。平沢屏山が活躍したのはまさにこの時代であった。しかし、蝦夷地が北海道と改称され、同化政策が急速に推進されるようになるとアイヌの生活も変化を余儀なくされ、アイヌ絵も次第に影をひそめていった。そのような意味から、屏山は「最後のアイヌ絵師」と呼ばれている（註44）。

（3）「種痘施行図」の背景

①　塩田順庵筆「讃」

「種痘施行図」には、以下に示したような塩田順庵の筆になる「讃」があり、その制作の経緯を知ることができる。なお、筆者の塩田順庵は、金沢生まれの儒学者で、幕府医師・塩田宗順の養子となった。1856（安政3）年、幕命により箱館に渡って医学所などの設立にあたり、その後1862（文久2）年に江戸に帰って幕府医学所の教諭となるなど、医学や箱館にもゆかりのある儒学者であった。以下、濱田淑子による翻刻に加えて、筆者による書き下し文と大意を示した。

【翻刻】
蝦夸性頑愚　多不可諭者　如痘瘡瘟疫之類　畏之甚於豺狼　一有傳染者　輙父子不相顧委而避于山中　或至一郷相率而遷徙　竟使病者萬一生矣　丙辰冬　鎮臺村垣公巡視西部　會遭痘瘡流行之運　男女少壮死者無算　有惨毒不忍見者　於是乎公惻怛心藹然啓發　且謂　苟如是　則戸口減日甚一日　何開拓之爲　救之當如捍燃眉　具其狀聞　明年夏　官差痘醫使之行引接法　第民不肯従　以爲種痘病我　皆望風而逃匿焉　公又使吏百方諭之始得施接法　三月之間　陸續至六千餘人　嗚呼公一念仁　躋民於壽域　如是其多也　世偁公之徳　或有圖而傳之者　語曰　民是國之本　又曰　足食足兵　今公織在巡撫　能充其慈愛惻怛心　以憐疫氓　薄税斂　辟田野　勧稼穡爲先務　則不出七年　必至桑麻相望鶏犬相聞　由是固吾彊圉靖吾邊虞　長絶国家北顧憂　則亦得有繪公像而鬻之者　豈止是小圖也哉

塩田泰拝誌

【書き下し文】
蝦夷の性は頑愚にして、諭すべからざる者多し。痘瘡瘟疫の類の如くは、之を畏ること豺狼よりも甚し。一たび傳染する者有らば、輙ち父子相顧みず、委て山中に避く。或は一郷相率いて遷徙するに至り、竟に病者をして萬に一生無からしむ。
丙辰の冬、鎮臺村垣公、西部を巡視し、痘瘡流行の運に會い遭う。男女少壮の死するもの算うるなし。惨毒見るに忍びざる者あり。是においてや、公惻怛の心から藹然啓發し、且つ謂うに、苟も是の如くんば、則ち戸口の減ずること、日に一日より甚し。何ぞ開拓の爲にこれを救ふこと、當に眉を燃やすを捍ぐが如し。具に其の狀を聞く。
明年の夏、官痘醫を差しつかわし、之をして接法を行引せしむるも、第民肯んじて従わず。以爲らく、種痘は我を病ましむと、皆を風を望みて逃げ匿れるか。公又吏をして百方之を諭させ、始めて接法を施すを得たり。三月之間、陸續六千余人に至る。
嗚呼、公は一念の仁、民を壽域に躋らす。かくの如く其れ多きなり。世公の徳を偁へ、或いは圖をして之を傳ふる者あり。語に曰く、民は是國の本、又曰く、食を足らし、兵を　足らす。公の織、巡撫に在り。能く其の慈愛惻怛の心に充ち、以て疫氓を憐れみ、税斂を薄くし、田野を辟き、稼穡を勧むるを先務と爲す。則ち七年を出ずして、必ず桑麻を相望し、鶏犬相聞こゆるに至らん。是に由り、吾が彊圉を固め、吾が邊虞を靖んじ、長く国家北顧の憂を絶つ。則ち亦、公の像を絵て之を鬻ぐ者有るを得るは、豈に止この小圖のみならんや。

塩田泰拝誌

【大意】
蝦夷地のアイヌは疱瘡を恐れ、感染した者がいると親子でもこれを山中に遺棄したり、あるいは一つの村全体が他所に逃げ去ったりしたので、亡くなる者が多かった。
安政３年（1857）の冬に、箱館奉行である村垣範正が蝦夷地西部を巡視し、疱瘡流行の状況を見たところ、成年男女や子どもの死者が数多く、見るに忍びない状態であった。村垣範正は、このようにアイヌの人口が日を追って減少していくのならば、蝦夷地の開拓にとって望ましいことではないので、彼らを救うのは焦眉の急であると考えた。
安政４年（1858）の夏に、幕府は医師を派遣して種痘を行わせたが、アイヌは恐れをなして逃げ隠れしてしまった。村垣は部下の役人たちに命じてあらゆる手段を尽くして説得したので、ようやくアイヌに種痘を実施することができた。種痘は３か月間にわたり、6000余人に及んだ。
村垣範正は、その後も善政を敷いたので、蝦夷地は桑や麻が生い茂り、鶏や犬の声が聞こえる平和な田園風景となった。これによって、周囲を強く固めて辺境の不安をはらい、長く北の憂いを絶ったのである。

②　箱館奉行村垣範正

塩田順庵の筆によってその功績を称えられている村垣範正は、「種痘施行図」の中では右上部に描かれている。左右に配下の武士を従えて水墨画の描かれた衝立の前に座し、桑田立斎らによるアイヌへの種痘接種に立ち会っている。但し、松木明知は、村垣範正が記した「村垣淡路守公務日記」（『大日本古文書』 所収）にこの記事がないことから、実際には立ち会っていなかったと推察している（註45）。

さて、その村垣範正は、幕臣（旗本）の子として1813（文化10）年に江戸築地に生まれた。通称を与三郎、あるいは淡路守、号を淡叟という。右に示したものは、『国史大辞典』や『日本人名大辞典』等をもとに筆者が作成した村垣範正の略年表である。

その経歴を見ると、若い頃から庭番を務めるなど幕府の情報収集に携わった能吏であることが覗えるが、長じて箱館奉行・外国奉行・神奈川奉行など幕末の外交の第一線で活躍している。村垣範正の名前は、中学校社会科はもとより高等学校日本史でも扱うことはほとんどないが、ロシア使節プチャーチン来航、台場築造・大船建造の解禁、万延遣米使節（咸臨丸）、ロシア艦隊対馬占拠事件など幕末外交史の重要局面に当事者として関わっており、もっと広く知られて良い人物であろう。

村垣範正が勤めた箱館奉行とは、幕府が重要拠点などに設置した遠国奉行の1つで、1799（寛政11）年～1821（文政4）年の前期幕領期、1855（安政2）年～1868（明治元）年の後期幕領期のいずれにも設置された。外国との交渉にあたる幕府中枢の優秀な人材を箱館奉行としたことに、幕府の蝦夷地を重視する姿勢を見ることができる（註46）。

村垣範正の箱館奉行としての業績の1つは、前述の「讃」が称賛するように、1857（安政4）年に、蝦夷地のアイヌの間に蔓延していた天然痘対策のために幕府に種痘医の派遣を要請したところにある。これは幕府が正式に認めた最初の種痘であり、江戸や大坂よりも早く実施されたことは注目に値する。3か月にわたり6000余人に接種した大事業であった。当初種痘を恐れて逃亡するアイヌを説得してようやく実現した経緯が「讃」に記されているが、「種痘施行図」が描く囲炉裏を囲んで談笑するアイヌの様子に落居した状況が読み取れる。また、衝立の背後には漆器や陣羽織などアイヌが欲する宝物等が描かれており、これらが種痘接種の褒美として与えられたという説得の背景も覗うことができる。

なお、蝦夷地を巡回した村垣範正が天然痘に倒れるアイヌに憐憫の情（「有惨毒不忍見」）を持ったと「讃」にはあるが、種痘接種のより本質的な動機は蝦夷地開拓のため（「何開拓之爲」）の人口維持であり、それはロシア南下（「北顧憂」）への対応だったことも記されており、蝦夷地直轄化における幕府の姿勢をここからも確認できる。

村垣範正略年表

・1813（文化10）年	江戸築地に誕生
・1831（天保2）年	小十人格庭番となる（19歳）
・1854（安政元）年	勘定吟味役・海防掛・蝦夷地掛となる（42歳） 堀利熙と共に松前・蝦夷地を調査 下田でロシア使節プチャーチンを応接
・1855（安政2）年	台場普請・大筒鋳造・大船建造等を命じられる（43歳）
・1856（安政3）年	箱館奉行となる（44歳） 蝦夷地を巡察
・1857（安政4）年	幕府に種痘の必要を上申（45歳）
・1858（安政5）年	外国奉行となり、箱館奉行も兼任（46歳）
・1860（万延元）年	勘定奉行・神奈川奉行も兼任（48歳） 日米修好通商条約の批准のため副使として渡米 （正使新見正興・目付小栗忠順）
・1861（文久元）年	対馬のロシア艦隊退去の交渉を担当（49歳） 箱館奉行となり、箱館に砲台建設指示
・1863（文久3）年	作事奉行となる（51歳）
・1864（元治元）年	若年寄支配寄合となる（52歳）
・1868（明治元）年	病のため隠居（56歳）
・1880（明治13）年	死去（68歳）

③　蘭方医桑田立斎と牛痘種痘法

次に種痘を接種した桑田立斎について触れておきたい。次ページに示したものは、『国史大辞典』や『日本人名大辞典』等をもとに筆者が作成した桑田立斎の略年表である。桑田立斎は、幕末に活躍した蘭方医で、牛痘種痘の実施と普及に専念し、生涯10万人種痘の悲願を立て、7万人余の実績を上げた。種痘針を握ったまま亡くなったという逸話も残り、死後「幕末のジェンナー」とも称せられた。

その子孫でもある歴史家桑田忠親によれば(註47)、1857(安政4)年に幕命を受けて蝦夷地に渡った際には、西村文石・井上元長・秋山玄潭という3人の弟子、4人の若党、それに1人の種痘児とその父母を伴ったという。これは、種痘児の膿は次第に感染力を失うので、その道程で別の子どもに植え次ぐというリレー方式を採ったということであった。この時、幕府は東蝦夷地を桑田立斎、西蝦夷地を箱館の医師深瀬洋春に担当させたので、桑田立斎は、箱館・鷲木・国縫・長万部・幌泉・十勝・厚岸・根室・野付・泊と回った。「種痘施行図」は箱館奉行所を舞台としており、桑田立斎は、衝立を背にする箱館奉行村垣範正の前で緋毛氈に座り、アイヌの手を取って種痘を施す剃髪の人物に描かれている。その左隣のやはり剃髪の医師は弟子の西村文石である。ちなみに、桑田立斎や西村文石の左隣に巻紙に何かを記して

いる武士がいるが、これは種痘を実施したアイヌの名前等を記録している箱館奉行所の役人と思われる。

そもそも種痘とは、毒性を弱くした天然痘（疱瘡）の病原体（痘苗）を人の皮膚に接種して、その部分だけに軽い痘瘡を起こさせて免疫を得る方法である。天然痘はウイルスを病原体とする感染症で、致死率が非常に高いことから恐れられ、神仏に頼ってこれを退散させようとした「疱瘡神」や「疱瘡絵」などの民間信仰の証跡も残る。医学的には、古くは鼻孔に疱瘡患者の膿のかさぶたの粉を吹き込んだり、皮膚を切って膿をすり込んだりする人痘種痘なども行われていたが、効果や安全性に問題があった。画期的な治療法としては、1796年にイギリスのジェンナーが発見した牛痘種痘法であり、その後急速に世界中に伝播した。恐れられていた天然痘も牛痘種痘法によって克服され、1980（昭和55）年にはWHOが天然痘根絶を宣言するに至っている。

我が国では1806（文化３）年に起きたフヴォストク事件（文化露寇）の際にロシアに拉致された中川五郎治が、帰国後の1824（文政4）年頃松前藩領で種痘を実施したが途絶えていた。牛痘はすぐに感染力を失うので、保存が難しかったのである。大きく動いていくのは、略年表にもあるように、1849（嘉永2）年に、オランダ商館医モーニッケが牛痘をもたらすことに成功したことにある。これは各地の蘭方医たちに広がっていった。桑田立斎には、佐賀藩医の楢林宗健から江戸藩邸の伊東玄朴に伝来した牛痘が伝えられた。大坂の緒方洪庵が入手するのもこの時である。こうした蘭方医たちの努力にも拘わらず、種痘は公認されなかった。これは幕府医官を占める漢方医らの妨害によるものであったとされる。しかし、桑田立斎らの蝦夷地での種痘の成功はこうした情勢を一変させた。1858（安政５）年には伊東玄朴・大槻俊斎らが「神田お玉が池種痘所」を設置し、これは1860（万延元）年には幕府直轄となっていったのである（註48）。

	桑田立斎略年表
・1811（文化８）	越後国新発田に誕生（父は新発田藩士村松喜右衛門） 江戸の坪井信道の学塾で蘭学（医学）を学ぶ
・1841（天保12）	蘭方医桑田玄真の養子となる（31歳）
・1842（天保13）	江戸深川に小児科を開業（32歳）
・1849（嘉永2）	オランダ商館医モーニッケから牛痘種伝来 江戸鍋島藩邸から入手して種痘に成功（39歳）
・1857（安政4）	幕命により蝦夷地に渡り、アイヌに種痘を実施（47歳）
・1868（明治元）	死去（58歳）

（4）教材化の視点

①　異域から内国へ

波嶋筆「アイヌ人物屏風」の教材化のところでも述べたが、近世の幕藩制的外交体制の中では、幕府が直轄する長崎以外は、それぞれの大名（宋氏・島津氏・松前氏）に委任し、それを介在とした外交が展開されていた。これは中国の冊封体制からの自立を志向する日本型華夷秩序の形成というものであり、その中で朝鮮王国･琉球王国は「通信の国」（清とオランダは「通商の国」）、蝦夷地は「異域」と位置付けられていたのである。

しかし、18世紀後半以降のロシアの南下という外圧に伴い、異域であった蝦夷地を内国化していく動きが見られるようになる。それが幕府による直轄化（幕領化）であり（註49）、幕領化の時期は1799（寛政11）年から1821（文政4）年の前期幕領期、松前藩復領期を挟んで1855（安政2）年から1868（明治元）年の後期幕領期と2回見られる。前述のように「アイヌ人物屏風」と関係の深い「夷酋列像」の虚構性はこの前期幕領期と大いに関わるものであったが、「種痘施行図」は後期幕領期と関わるものである。

幕領化にあたっての興味深い史料を高倉新一郎は提示している（註50）。それは1799（寛政11）2月20日付けの「蝦夷地御用趣意支配向之被申渡候書取」で、これは前期幕領期の開始にあたって、老中が蝦夷地御用掛に指示した文書である。ここに見られる方針は幕府の姿勢をよく示すものであり、後期幕領期にも適用されたという。以下に筆者による大意を示した。

1799（寛政11）年2月20日付「蝦夷地御用趣意支配向之被申渡候書取」（大意）

蝦夷島は未開の地であり、夷人は衣食住も整わず人倫もわきまえない不憫な者である。これを徳化教育し、日本の風俗に帰すようにすれば外国から手懐けられるようなことはない。物を与えて服従を強いるようなやり方ではなく、交易によって潤うようにするのがよい。蝦夷地の商人たちの不正がないように監視する必要がある。

1　耕作を教え、穀食に慣れるようにすること。
2　幕府領になったことを簡潔に伝え、騙したりしてはならない。
3　賃金はきちんと支払い、働きの良い者には米や酒を与えること。
4　（松前藩が禁じていた）夷人の日本語使用を許可する。
5　夷人が希望すれば、（和人の風俗である）月代を許し和服も与えよ。
6　上を崇め、親には孝、兄弟親族は睦まじく、朋友には信を尽くすことを諭し、いろは文字や数字を教えること。
7　現在豊かな夷人は多妻、貧しい夷人は独身である。これでは人口が減るので、男女ともに独身者がないようにせよ。
8　病人には寝具や薬を与え、十分に手当をし、死人が増えないようにせよ。

前文には「外国」すなわちロシアによるアイヌ懐柔を警戒する目的が明示されており、そのために、1（耕作の奨励）・4（日本語使用の許可）・5（和人風俗の奨励）・6（和人道徳の教化）に見られるように、アイヌを和人に同化させようとする「同化」政策を見ることができる。それとは異なるものが、2（欺瞞の禁止）・3（公正な取引の遵守）・8（病人の介護）で、こちらはアイヌへの保護・労りを目的とする「撫育」政策と言える。すなわち、幕領化にあたって、幕府はロシアによるアイヌ懐柔を危惧しながら「同化」と「撫育」で蝦夷地統治に臨んだのである。1858（安政4）年の種痘接種もそうした撫育政策の一環として実施されたことが分かる。

②　アイヌの教材化の視点

アイヌの教材化を考える上で、その出発点になっているのは、1997（平成9）年に成立した「アイヌ文化振興法」であり、これは2008（平成20）年の「アイヌを先住民族とする国会決議」を経て、2019（令和元）年に成立した現在の「アイヌ施策推進法」に引き継がれている。これを受けて基本方針が定められ、学習指導要領も「先住民族であるアイヌの人々には独自の伝統や文化がある」ことに触れることを規定している。

例えば、2017（平成29）年告示の小学校学習指導要領（社会編）では、小学校の歴史学習全体を通して配慮すべき事項として、我が国の歴史は長い歴史をもち伝統や文化を育んできたことや、祖先の生活や人々の努力が今日の生活と深く関わっているように気付かせることを挙げ、その中で先住民族であるアイヌに独自の伝統や文化があることに触れることを求めている。

こうした方向性は中学校や高等学校の学習指導要領にも共通しており、さらに内容項目との関連の中で示されている。2017（平成29）年告示の中学校学習指導要領（社会編）では、B・(3)・(イ) 江戸幕府の成立と対外関係の中で、蝦夷地におけるアイヌの北方との交易や交流について扱われている。本稿2章で述べた「四つの口」における国際交流に関する視点である。2018（平成30）年告示の高等学校学習指導要領（地理歴史編）「日本史探究」では、B・(3)・ア（イ）日明貿易の展開と琉球王国の成立、C・(3)・ア（ア）貿易の統制と対外関係で示されており、中学校と共通する近世の国際交流のほかに中世の国際関係に関連して扱うことが求められている。

学習指導要領「解説」において、アイヌに触れているのは以上であるが、高等学校「日本史探究」では、例えばD・(1)・ア（ア）対外政策の変容と開国では、欧米諸国のアジア進出が進展する国際環境の中での幕府の対外政策の変容に関する問いを設定することが求められており、本稿2章で述べた国際環境の変化と松前藩の政治的意図や、3章で述べている蝦夷地の内国化の切り口から扱えると考えている。

現行の中学校教科書、例えば『新編 新しい社会 歴史』（東京書籍）を見ると、中世や近世で扱うほか、近代における「国境と領土の確定」のページで「北海道の開拓とアイヌの人々」という項目を挙げて、土地や漁場を奪い伝統文化を否定したアイヌへの同化政策について取り上げている。こうした同化政策については高等学校教科書でも扱われており、例えば『日本史A　現代からの歴史』（東京書籍）は、1869（明治2）年の開拓使設置から1899（明治32）年の北海道旧土人保護法までの年表を掲載している。また、『新編 新しい社会 歴史』（東京書籍）は現代の「持続可能な社会に向けて」のページで「日本社会の課題」という項目を設けて人権の尊重・差別や偏見の撤廃を挙げ、部落差別・在日韓国朝鮮人・女性・子ども・高齢者・障がい者とともにアイヌを例示しているが、当然ながらこうした視点も忽せにはできないものである。

こうしたことから、次期学習指導要領においても、中学校社会ではC・(1)・(イ)明治維新と近代国家の形成、C・(2)・(イ）日本の経済の発展とグローバル化する社会、高等学校「日本史探究」でもD・(1）近代への転換、D・(4）現代の日本の課題の探究などでも扱われることになるものと考えられる。

③　国民国家と明治維新

最後に、次期学習指導要領で日本史と世界史を統合した新科目として設置される「歴史総合」における実践を考えてみたい。「歴史総合」は4つの大項目からなるが、そのうちのBが「近代化と私たち」である。生徒が資料から興味・関心を持ったこと・疑問に思ったこと・追究したいことなどを「問い」という形で表現させ、その「問い」を踏まえて主題を設定することが求められている。資料を活用するとともに、主題や問いを中心に構成する学習活動が想定されているのである。

Bの中項目は（1）近代化への問い、(2）結び付く世界と日本の開国、(3）国民国家と明治維新、(4）近代化と現代的な諸課題という構成であるが、この（2）で国民国家の形成の背景などに着目して主題を設定し、国民国家の特徴や社会の変容などを多面的・多角的に考察させ表現させることが考えられる。国民国家とは、一国家の領域には一国民

しかいないというイデオロギーに基づき、文化・言語・宗教などの異なる先住民などの集団に「国民」としてのアイデンティティーを持たせようとするところに特徴があるという（註51）。

こうした近代における「国民」や「国民国家」を学習する上で、領域内の異民族（先住民）であるアイヌをどう「国民」化していったのかという同化政策を扱うことは大変意義があるが、その同化政策が「撫育」を伴って幕末から始まっていることを示す「種痘施行図」は多面的・多角的な考察を行う上で好適な教材となりうると考えている。

④　近代化への問い

例えば「種痘施行図」をもとに「問いを表現する」学習活動を行った場合、どのような展開になるか、筆者のゼミ学生の協力のもとに実施してみた。先ず「種痘施行図」を見せて、何の情報もなく「この絵を見て、疑問に思ったことや興味・関心を持ったことを挙げてみましょう」という指示を出した。もちろん学生たちには初見の資料である。時間は５分間取り、友人と相談せずに個人の気付きを答えさせたところ、次のような反応があった。

・ちょんまげの人とそうでない人がいる。
・ちょんまげの人は何を監視しているのか？　下の方にいる人は何を書いているのか？
・坊主頭の人は、半裸の人の手を取って何をしているのか？
・粗末な服を着ていたり、半裸だったりする人たちは何者か？
・半裸の人たちはなぜ腰を屈めて歩いているのか？
・屏風の後ろに置かれた品々は何か？　何のために使うのか？
・そもそもこれは一体何の集会なのか？

各自が挙げた内容は発表させ、全員で共有した。相互の気付きから学び合い、さらに広く深い読み取りになっていった。「種痘施行図」は、基礎知識がなくても、注視すれば月代で和服を着た人たちと総髪で半裸の人たちがいることには気付く。そこから「どんな人たちなのだろう」、「一体何の集会なのだろう」という興味・関心が高まって行く様子が見て取れた。

その後、学生たちの挙げた疑問だけに答えた。教師が全てを説明してしまわないところが肝要で、もし時間があるのならば調べさせても良い。この一問一答式のやり取りで、学生たちは、和人とアイヌがいること、月代・和服で屏風を背にしているのは箱館奉行・村垣範正とその配下の武士、坊主頭の人は医師・桑田立斎とその弟子でアイヌに種痘を接種しているところ、屏風の後ろにある品々は種痘を終えたアイヌへの褒美と考えられることなどの知識を獲得していった。ちなみに腰を屈めて歩くのはヲンガミというアイヌの相手に敬意を払った作法である。

次にグループ活動に移行し、「追究したい課題を挙げてください」という指示を出し、「国民国家の形成」に関する授業を想定するように補足した。この補足は学生たちが課題を考えていく土台となる。学生たちは、「種痘施行図」から読み取った情報を基に、中学校や高等学校におけるアイヌに関する既習事項を加え、今後の授業展開を想定しながら協議していた。協議は活況を呈し、認識は点から面に広がっていったが、結局「アイヌと中央政権（江戸幕府・明治政府）の関係の変遷」ということに落ち着いた。学生たちの活動はここまでとしたが、学習指導要領ではこの後に「表現した問い」と関連付けた主題を教師が設定することになっている。この場合、「どのような経緯で国民国家は誕生したのだろうか」というようなものになっていくだろう。

4　結びにかえて

以上、本稿では、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館の所蔵する「アイヌ人物屏風」と「種痘施行図」という２つのアイヌ絵の情報を整理してその教材化について考えた。「アイヌ人物屏風」は「夷酋列像」との関連性が高く、その虚構性に気付かせる上で有効である。そうした点を踏まえて、近世の「四つの口」における国際交流の実態や、18世紀後半のロシア南下という国際環境の変化への対応についてより深く考察できる教材となりうることを述べた。また、こうした「夷酋列像」の補完的な活用だけでなく、その構図等からアイヌに対する和人の認識を考察させる教材になりうる可能性も指摘したが、これについては今後さらに考えていきたい。

一方、「種痘施行図」は、幕末にアイヌに種痘を接種した様子を描いており、感染症対策など医療史の視点からも興味深い資料であるが、「アイヌ人物屏風」同様に18世紀後半の国際環境の変化への対応や国民国家形成の視点からも扱える教材である。すなわち、和人のアイヌに対する同化政策が「撫育」を伴って幕末から始まっていることを示す資料であり、我が国における国民国家形成に関する多面的・多角的な考察を行う上で好適な教材である。その鮮明な画面から新科目「歴史総合」における「問いを表現」する学習活動などにも活用できることも述べた。

さて、2019（令和元）年に成立したアイヌ施策振興法に

は「アイヌの人々が民族としての誇りをもって生活することができ、及びその誇りが尊重される社会の実現を図り、もって全ての国民が相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に資することを目的とする」とある。これを本稿と関連させて考えると、アイヌ文化の独自性を学ぶことは、アイヌだけにとどまることなく、日本列島各地を文化的な多面性で捉える複眼的で豊かな歴史認識につながっていき、そうした歴史認識が共生社会の実現に資するのではないかということである。多様性の尊重、共生社会の実現という現代的課題の実現のためには、その基盤としての歴史認識を学ぶ必要がある。そのための教材として「アイヌ人物屏風」や「種痘施行図」を活用していく意義を確認し、本稿の結びにかえたい。

註

1） 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館・本田秋子課長・学芸主査のご教示による。
2） 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館『アイヌ文化展図録』1990年に所収。
3） 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館『アイヌ文化展図録』1990年に所収。
4）『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報6』2014年に所収。
5） 東北福祉大学教職課程支援室『教職研究2017』2018年に所収。
6）『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報1』2009年に所収。
7）『日本医史学雑誌』56巻3号、2010年。
8） 佐々木利和「『蝦夷風俗十二カ月屏風』について－平沢屏山とその作品－」（『北海道の研究 第3巻』清文堂出版、1983年 所収）、佐々木利和「平沢屏山とアイヌ絵」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌの四季と生活－十勝アイヌと絵師・平沢屏山』1999年 所収）、五十嵐聡美「最後のアイヌ絵師－平沢屏山」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌの四季と生活－十勝アイヌと絵師・平沢屏山』1999年 所収）、新明英仁『「アイヌ風俗画」の研究－近世北海道におけるアイヌと美術』中西出版、2011年等。
9） 崇田篤『東北福祉大学所蔵「種痘施行図」とオムスク造形美術館所蔵「種痘図」の比較考察』（東北福祉大学下山ゼミ編『下山ゼミ論集・第1集』2019年）。
10）東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館『アイヌ文化展』図録、1990年。
11）芹沢長介「アイヌ文化展出品資料について」（東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館『アイヌ文化展』図録、1990年に所収）。
12）濱田淑子「波嶋筆 アイヌ人物屏風」（東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館『アイヌ文化展』図録、1990年に所収）、佐藤花菜・濱田淑子「『アイヌ人物六曲一双屏風』（東北福祉大学コレクション）と関連するアイヌ風俗画」（『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報６』2014年）。
13）「夷酋列像」展実行委員会・北海道新聞社『夷酋列像 蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界』図録、2015年。
14）榎森進『アイヌ民族の歴史』草風館、2008年、菊池勇夫『十八世紀末のアイヌ蜂起－クナシリ・メナシの戦い』サッポロ書店、2010年　等。
15）「夷酋列像」展実行委員会・北海道新聞社『夷酋列像 蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界』図録、2015年に所収、ｐ20～21（写真）、ｐ192（翻刻）。
16）中村真一郎『蠣崎波響の生涯』（新潮社、1989年）、井上研一郎「蠣崎波響の生涯と《夷酋列像》」（北海道立函館美術館『蠣崎波響とその時代』図録所収、1991年）等。
17）菊池勇夫『十八世紀末のアイヌ蜂起－クナシリ・メナシの戦い』サッポロ書店、2010年。
18）白石恵理「フィクションとしてのアイヌ画像－蠣崎波響『夷酋列像』を読む－（『美學』52-3、2001年）、五十嵐聡美『アイヌ絵巻探訪』北海道新聞社、2003年。
19）春木晶子「《夷酋列像》－12人の『異容』と『威容』」（「夷酋列像」展実行委員会・北海道新聞社『夷酋列像 蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界』図録、2015年）に所収。「関羽図」についても同図録ｐ86に掲載。
20）井上研一郎「蠣崎波響の生涯と《夷酋列像》」（北海道立函館美術館『蠣崎波響とその時代』図録所収、1991年）。
21）佐々木利和・谷本晃久「『夷酋列像』の再検討に向けて－シモチ像と『叡覧』と－」（『北海道大学アイヌ文化センター研究紀要』2、2017年）。
22）井上瑠菜「蠣崎波響筆《夷酋列像》にみる『かたち』の継承－近世日本における図像の転用－」（宮城学院女子大学人文社会科学研究所『人文社会科学論叢』29号、2020年）。
23）春木晶子「《夷酋列像》－12人の『異容』と『威容』」（「夷酋列像」展実行委員会・北海道新聞社『夷酋列像 蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界』図録、2015年）。
24）中村真一郎『蠣崎波響の生涯』新潮社、1989年、芹沢長介「アイヌ文化展出品資料について」（東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館『アイヌ文化展』図録所収、1990年等。
25）芹沢長介「アイヌ文化展出品資料について」（東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館『アイヌ文化展』図録、1990年　所収）。
26）春木晶子「《夷酋列像》－12人の『異容』と『威容』」（「夷酋列像」展実行委員会・北海道新聞社『夷酋列像 蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界』図録、2015年）に所収。「関羽図」についても同図録ｐ86に掲載。
27）アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌　上』1969年。
28）佐々木利和・谷本晃久「『夷酋列像』の再検討に向けて－シモチ像と『叡覧』と－」（『北海道大学アイヌ文化センター研究紀要』2、2017年）。
29）関根達人『モノから見たアイヌ文化』吉川弘文館、2016年。
30）下山忍「『アイヌ人物屏風』との比較を通した『夷酋列像』の教材化について－「地理歴史科指導法」の実践から－」（東北福祉大学教職課程支援室『教職研究2017』2018年に所収）。
31）楳澤和夫「北のシルクロード－『鎖国』とアイヌ－」（千葉県歴史教育者協議会編『絵画資料を読む日本史の授業』国土社、1993年に所収）。
32）五十嵐聡子『アイヌ絵巻探訪』北海道新聞社、2003年。
33）加藤公明「肖像画のアイヌたちはなぜ蝦夷錦を着ているのか」（同『考える日本史授業2』地歴社、1995年）、加藤公明「偽りのアイヌ像はなぜ描かれたのか」（同『考える日本史授業3』地歴社、2007年）。
34）「『夷酋列像』をめぐる人」（「夷酋列像」展実行委員会・北海道新聞社『夷酋列像 蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界』図録、2015年）に所収。
35）「アイヌ長老」（『見る・読む・わかる日本の歴史４　近代』朝日新聞社、1993年に所収）。
36）濱田淑子「平沢屏山筆『種痘施行図』」（『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報1』2009年に所収）
37）越崎宗一『アイヌ繪』北海道出版文化センター、1945年。
38）新明英仁『「アイヌ風俗画」の研究－近世北海道におけるアイヌと美術』中西出版、2011年。
39）濱田淑子「平沢屏山筆『種痘施行図』」（『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報1』2009年に所収）。

40）霜村紀子「平沢屏山とその時代」（財団法人アイヌ文化振興・研究機構『アイヌの美－カムイと創造する世界』2009年に所収）。
41）富士川游「衛生門　疱瘡の話　附種痘の由来」（『風俗畫報』第93号、1892年に所収）。
42）越崎宗一『アイヌ繪』北海道出版文化センター、1945年。濱田淑子「平沢屏山筆『種痘施行図』」（『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報1』2009年に所収）。
43）佐々木利和「平沢屏山とアイヌ絵」（財団法人アイヌ文化振興・研究機構『アイヌの四季と生活－十勝アイヌと絵師・平沢屏山』1999年に所収）。
44）五十嵐聡美「最後のアイヌ絵師－平沢屏山」（財団法人アイヌ文化振興・研究機構『アイヌの四季と生活－十勝アイヌと絵師・平沢屏山』1999年に所収）。
45）松木明知「新出の平沢屏山のアイヌ種痘図に関する一考察－オムスク造形美術館所蔵の『種痘図』を巡って」（『日本医史学雑誌』第56巻第3号、2010年に所収）。
46）加藤博文・若園雄志編『いま学ぶアイヌ民族の歴史』山川出版社、2018年。
47）桑田忠親『蘭方医桑田立斎の生涯』中央公論社、1981年。
48）新村拓編『日本医療史』吉川弘文館、2006年。
49）菊池勇夫『幕藩体制と蝦夷地』雄山閣出版・1984年、浪川健治『アイヌ民族の軌跡』山川出版社・2004年等。
50）高倉新一郎『新版アイヌ政策史』三一書房、1972年。
51）歴史学研究会編『国民国家を問う』青木書店、1994年。

口絵・挿図　画像提供：東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

（下山　忍・東北福祉大学教授）